

BOOK REVIEW

流甲

あなたの“心を虜にする”お経は何？

『いつか死ぬ、それまで生きる わたしのお経』

⇔ 150分

伊藤 比呂美 著

本書で最初に出遭うお経が「開経偈」。漢文テキストと著者のわかりやすい日本語訳が並んでいる。内容は著者が、心をゆさぶる「妙なる法」に出遭えたことに感謝し、その奥義を見極めたいと願うものである。

偈は詩の形で書かれたお経のことで、開経偈とは人々が集まって読経や礼拝を始める前に唱える偈だそう。著者の比呂美さん（そう呼ばれるのが好きみたい）は、本来韻文であったものを自由律の訳文に施した。解説に「比呂美さんの二十年にわたる仏典新訳の集大成」と紹介されている。お経へのこだわりや愛着、その経緯などを手取り早く知るにはうってつけの書といえる。

彼女を引き付けたお経の魅力とは何なのか。とりわけ二つのポイントに気づくであろう。ひとつは“死”。若い頃は死のことなんか、まったく考えない。日々悩みながらも、今を必死に生きることと精一杯。しかし齢を重ねると、引きも切らず死がリアルに迫ってくる。まさに著者がそう。本書の書き出しの「父と母とお経とわたし」は、母、父（その後、夫、さらには犬）など、次々と彼女の身近で起きる死とお経とのなれそめの告白である。仏教による救いを両親に持ちかけるが、二人は無関心。ミイラ取りがミイラになるとはこのことか、彼女自身が仏教にどっぷりとつかってしまう。死とは何か、死といかに向き合うかと問いかけたとき、著者を引き込まずにはおかきない考え方や見方がものの見事に表現され、彼女の心を虜にする。著者がお経を通じて

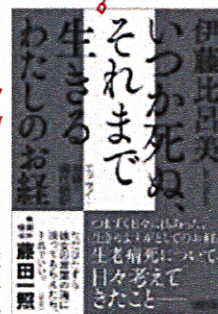
色80%+220%

11/13 (以下)

35

4/ミ

朝日文庫
2024年
780円+税



それをどんなふうに突き詰めていき、そしてどんな境地に達したのか。読者諸氏も彼女に付き従い、一緒に考えてみたらいい。

本書には著者の日常生活に入り込んだ死をモチーフにした幾編ものエッセイが盛り込まれている。死臭に引き寄せられる犬の本能を描いた「藪の中」、木を分解して自分の生命に取り込んでいく「キノコ」など、際物めいたエピソードが秀逸。こちらがおじけづくほどだ。

もうひとつは、詩人としてのアプローチである。お経を学ぼううちに、その詩的な特徴にいろいろと気づかされる。「信仰心の思いつめた心、ゆがんだ心。それから、ファンタジー性たっぷりの生き物や風景。そして、当時のインド文化の語りの癖。…それから、語り物としての形」。これらが著者の詩人としての資質にピッタリ。お経が、詩と語りの融合体としての現代詩に造り上げられる。簡潔で平明な日本語文が、澁澁とした律動を伴って次々に語られる。どのお経の訳文でも彼女の詩才が存分に発揮される。著者の詩的独創性がどこに潜んでいるか。それを

声に出して読みながら確かめてみるのは無上の喜びである。

できれば、本書の11年前に刊行された『読み解き「般若心経」』を合わせて読んでほしい。理由はいくつもある。そこには著者の若い頃の生臭い恋愛沙汰が赤裸々に語られている。その書の冒頭を飾るのが、それを背景にした「懺悔文」。著者がお経に目覚めた瞬間の記録。またこの書には本書のタイトルの一部である「いつか死ぬ、それまで生きる」という遠観めいた一文をすでに見出すことができ、当時の心境が映し出されている。それよりも重要なのは、本書で取り上げられたいくつものお経が、そのときすでに解説・解釈され、訳文も試みられている。それらがどのように改訳されているか、換言すれば詩的にいかに磨き上げられたのか、比べてみるのはわくわくする営みではないか。

お経の教えのひとつの“四苦八苦”を解説した箇所がある。そこで著者は述べている。「人生相談の悩みなんて、ほとんどこの八つの苦で説明できます」。傷つく自分がいれば、癒し・救いを求める自分がある。著者と同じように、きっとあなたが寄り添うことができるお経と出遭えることができるはず。

38

関本 英太郎